

【研究論文】

ルーブリック評価の運用に関する研究Ⅱ —小学校国語科（読むこと・伝統的な言語文化）の模擬授業の場合—

広島文教女子大学人間科学部 初等教育学科 教授 岡 利 道
学生 大 山 佳 乃

はじめに

前研究の岡・今崎・大野内（2016）では、本学初等教育学科における教職科目のうちの「教育実習Ⅰ」（小学校）と、専門科目の「卒業研究」で実施しているルーブリック評価の客観性及び妥当性を検討し、改善点を見出していった。本研究は、「教育実習Ⅰ」（小学校）の、とりわけ国語科授業づくりに焦点を当て、継続研究するものである。

この科目は、3年次の学生が週に2コマ分、前期科目として受講している。各教員の指導のもと、学生は選択した複数の教科について、教材研究し（ア）、学習指導案作成をし（イ）、模擬授業を行い（ウ）、そのあとは授業研究協議会をする（エ）。実際の授業においては、ウ・エが中心となる。ア・イは、課外での個別指導によってなされる。学生たちは、その他にも、ウのリハーサルとして、空き時間を利用してグループのメンバーが集まり、実際に試みて、それを検討し改善策を話し合っていることが多い。つまり、一種のアクティブ・ラーニングがなされているのである。このリハーサルのことを、本番の模擬授業のために備える、事前学修としての模擬授業であるということで、「模擬模擬（モギモギ）」と呼んでお馴染みになっている。

研究の方法としては、平成29年度の同科目における国語科の授業づくりの担当教員である筆者（以下では指導者と呼ぶ）が、グループ活動の概要をまとめる形を取る。その時、八つのグループのうちの一つであるAグループのグループ長であった大山佳乃学生（本学初等教育学科3年、以下では授業者と呼ぶ）の取り組みを跡付けていくようにする。授業者が、どのように力量を形成していくのか、その際にルーブリック評価がどのように役立っていくのか等について、各種資料をもとに、指導者の立場から分析・考察していく。

1 通常の模擬授業（第1クールにおける実践）について

ここでいう第1クールは、AからHまでの各グループに分けられた学生の全員が、当該の教科の模擬授業に取り組むというものである。第2・3・4クールにかけては、各学生とも、もう2教科を選んで模擬授業をすることになっている。授業者は、第1クールがもちろん国語科の、後のクールでは音楽科、そして理科の模擬授業をした。以下、授業者が第1クールで、どのように取り組んだのかということについて、概要を記すことにする。

（1）当該授業の学習指導案

授業者は、模擬授業本番の2週間前に指導者のところに相談に訪れ、本格的な準備を開始した。兎にも角にも、授業者の構想した学習指導案を示すのが最もわかりやすいと考える。

以下、標題・指導者名、さらに「1. 日時」から「10. 板書等計画」まで掲載する。人数・時間の制限があることから、実際には15分強の時間を使い、導入部分を中心に模擬授業をしていく。

国語科 学習指導案

指導者 教育実習生 大山佳乃

1. 日時 平成29年5月25日（木）第1校時
2. 場所 第5学年1組教室
3. 学級 第5学年1組 30名（男子15名・女子15名）
4. 単元名 声に出して楽しもう 「今も昔も」
5. 単元について

（1）単元観

本単元は、小学校学習指導要領国語編のC読むことの（1）イ「目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること」、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の（1）ア「伝統的な言語文化に関する事項」（ア）「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること」（イ）「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」及び、イ「言葉の特徴やきまりに関する事項」の言葉の働きや特徴に関する事項（イ）「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと」、語句に関する事項（カ）「語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと」に深い関連がある。

本題材は国語に対する関心と、我が国の伝統と文化に対する理解と愛情を養うものであり、道徳的な側面も兼ね備えている。児童は、これまで古典の本格的な学習経験はないが、「今も昔も」では『竹取物語』、『枕草子』、『平家物語』の冒頭部分を取り上げており、現代語訳を聞くとほとんどの児童が知っている有名な『かぐや姫』等であるため、親しみやすい内容となっている。また、中学校での古典の学習に接続しているが、小学校の今の段階では文語のきまりを学習することをねらうのではなく、児童が音読や意味の理解を通して古典の文章に親しめるようにすることをねらいとする。この学習を通して新たに出会った言葉一つひとつに興味を持たせ、国語の学習への意欲向上をねらいたい。

（2）児童観

本学級の児童は、週に1回設けられている保護者の方々による読み聞かせを楽しみにしている。高学年となり、興味が読み聞かせから離れつつある児童も数名いるが、難易度を適切に見極めて本を選定されている読み聞かせ隊の方の話は集中して聞いており、楽しんでいる様子が見受けられる。これまで学んだことのない古典の分野に取り組み、普段の言葉遣いとは違う言葉が多々出てくることで、学習前から難しいという固定観念をもつ児童が出るのが予想される。一方で昔話には興味を示しているため、親しみが持てるよう、うまく導きたい。

（3）指導観

指導にあたっては、児童が古典に対して難しいという固定観念を持つことがないように留意したい。

第1次で取り上げる『竹取物語』は児童のほとんどが耳にしたことがあるであろう『かぐや姫』であるため、昔話との関連から授業を進めることで学習意欲を高めることができると考える。また、古典の学習に興味をもたせられるよう、『竹取物語』では古文を読んで題名を当てるクイズ形式から始めたい。それに加え、古文だけでも話を理解できるよう物語に沿った絵カードを利用して、その時代の環境も視覚的に理解できるよう工夫したい。また現在とは違った環境や背景の中で書かれた物語であるため、言葉の響きの違いだけでなく、ものの見方や考え方についても考える時間を設けたい。授業全体を通して今と昔を比較しながら展開していきたい。

また第2次では、難しい言葉も多用され、児童にとってあまり馴染みがない『徒然草』『平家物語』を取り上げるが、ここでも古典に対するマイナスなイメージが残らないよう留意したい。また書き

込んだり一人でできる学習以上に、ペアで音読をしたり考えを共有したりする活動的な学習にしたい。

この単元を通して、古典に親しみ、言葉の移り変わりや人々の生き方、考え方の移り変わりに興味を持てるよう視覚的な教具やペアワーク、グループワーク等のアクティブ・ラーニングを取り入れたい。

6. 単元の目標

- 昔の人のものの見方や感じ方について知り、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づくことができる。 【学習指導要領の内容項目 伝国（1）ア（イ）・イ（カ）】
- 古典の文章を音読し、言葉の響きやリズムを味わうとともに、文章の内容の大体を理解することができる。 【学習指導要領の内容項目 伝国（1）ア（ア）・イ（イ）】

7. 評価規準

ア 国語への関心等	イ 話す・聞く能力	ウ 書く能力	エ 読む能力	オ 言語についての知識等
<ul style="list-style-type: none"> ・文語の調子を楽しみ、言葉の響きやリズムをつかんで声に出したり感想を持ったりしている。 ・語感や言葉の使い方に関心を持っている。 	—	—	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の内容の大体をつかみ、すらすらと音読している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昔の人のものの見方・感じ方について考えている。 ・時代によって言葉の違いがあることに気づいている。

8. 指導計画（全2時間）

次	学習内容 (時数)	評 価					評 価 規 準	評価方法
		関	話聞	書	読	言		
1	<ul style="list-style-type: none"> ・『竹取物語』を音読し、大体の内容を理解する。（1-本時） 	○				○ ○	<ul style="list-style-type: none"> ・文語の調子を楽しみ、言葉の響きやリズムをつかんで声に出したり感想を持ったりしている。 ・時代によって言葉の違いがあることに気づいている。 ・昔の人のものの見方・感じ方について考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ノート・行動観察 ノート・発表 ノート
2	<ul style="list-style-type: none"> ・『枕草子』、『平家物語』を音読し、大体の内容を理解する。（1） 	○			○		<ul style="list-style-type: none"> ・語感や言葉の使い方に関心を持っている。 ・文章の内容の大体をつかみ、すらすらと音読している。 	<ul style="list-style-type: none"> 行動観察 音読

9. 本時の展開

(1) 本時の目標

- 言葉の響きやリズムを味わい、内容の大体を把握したうえですらすらと音読することができる。

(2) 観点別評価規準

- ・言葉の響きやリズムに関心を持ち、時代によって言葉の違いがあることに気づいている。(ア・オ)
- ・昔の人のものの見方・感じ方について今の時代と比較しながら考えることができている。(オ)

(3) 準備物等

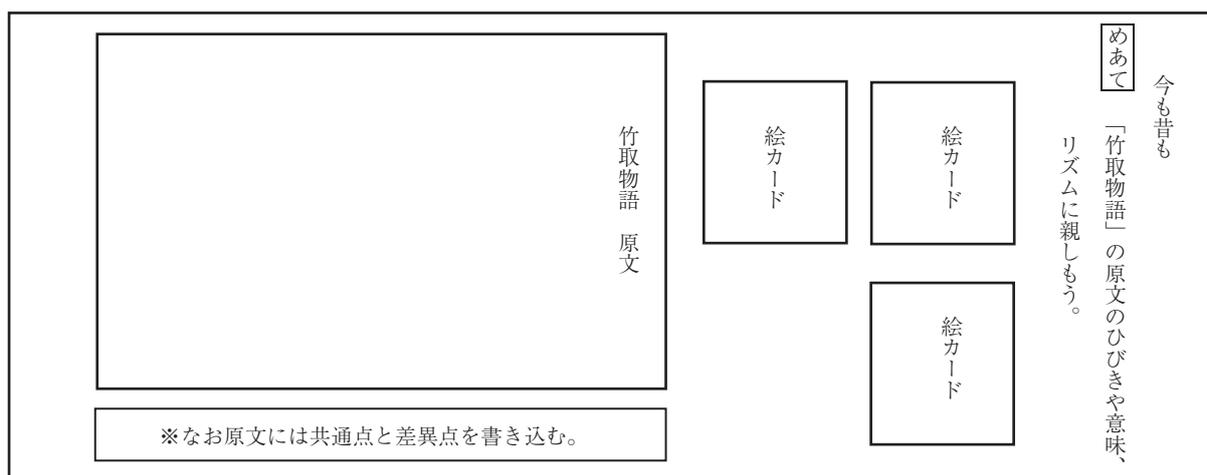
- ・教師：教科書，絵カード，古語カード（児童用），タブレットパソコン
- ・児童：教科書，ノート

(4) 学習の展開

学習活動	指導上の留意事項	評価規準〈評価方法〉
<p>【導入5分】</p> <p>1. 挨拶をする。 ・身近に使われている言葉の由来を知る。 「さようなら」=左様ならば 「おはよう」=お早くお起きになりましてご健康でおめでとう 「こんにちは」=今日はいいい一日でございませぬ 「ありがとう」=ありがたし→あることがかたい→めったにない、貴重 「おす」=柔道専門学校にて…「おはようございます」→「おはよーす」→「おーす」→「おす」 ・自分の普段話す言葉を振り返り言葉の由来を知ったり、祖父母、地域の方々の話す言葉と比べたりして、言葉が時代によって変わってきていることに気づく。</p> <p>2. 本時のめあてを理解する。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">「竹取物語」の原文のひびきや意味、リズムに親しもう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の積極的な発言を促す。 ・発表の際は挙手制を徹底する。 ・住宅（古代と現代）の写真を見せ、違いを感じさせる。 ・授業全体を古いもの（昔）と新しいもの（今）を対にして展開していく。 	
<p>【展開30分】</p> <p>3. 古語を使った神経衰弱をする。</p> <p>4. 教師による『竹取物語』の範読をどのような言葉が出てくるのかに気をつけながら聞く。</p> <p>5. これが現代で何と呼んでいる物語なのか予想する。</p> <p>6. 現代語訳を音読し、『かぐや姫』の話であることを確認する。（1回目：教師による範読、2回目：ペア読み、3回目：斉読）</p> <p>7. 『竹取物語』の原文の音読練習をする。（1回目：やまびこ読み、2回目：ペア読み、3回目：斉読）</p> <p>8. 古語と現代語、今と昔の文字や考え方（背景）の共通しているところ、異なるところを話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・初めに古語カードの語句がどの現代語とセットになるかICT教材で確認する。 ・時間を5分設定してタイマーで計測しておく。（すべての班が1度は終わるようにする。） ・これがどんな話なのか連想しながら聞くよう促す。 ・神経衰弱で使った古語カードの言葉が出てくることを伝え、集中させる。 ・古語カードに出てきた語句と共通して出てきた語句に気づかせる。 ・本文を黒板に貼り、キーワードに印をつけて確認する。 ・『竹取物語』という題名を発表し、めあてを完成させる。 ・現代語訳を音読しながら、絵カードを提示する。 ・現代仮名遣いについて最初に説明する。 ・ペアで1文ずつ交互に読み、読み終えたら交代して、読み終えたペアから着席するよう伝えてから活動を始める。 ・すらすらと、句読点まで一続きに読めるように徹底して指導する。 ・班で話し合い、発表する。（予想される解答） ・うつくしうて→かわいらしい（差異点） ・ひ→い、ふ→う、ゐ→い、む→ん(ク) ・現代においても古典においても物語は空想で現実ではない。（共通点） 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の響きやリズムに関心を持ち、時代によって言葉に違いがあることに気づいている。（行動観察・発表・ノート） ・昔の人のものの見方・感じ方について今の時代と比較しながら考えることができている。（ノート）

<p>【終結10分】</p> <p>9. 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・古語の意味の振り返りをする。 ・もう一度『竹取物語』の原文を音読する。 (・感想を発表する。) <p>10. 次時の予告を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・再度ICT教材を使用する。 ・時間に余裕があれば、もう一度全体で一斉に読む。 ・時間に余裕があれば、感想を発表させる。 ・次時は別の二つの古典『枕草子』『平家物語』に触れることを伝える。 	
--	---	--

10. 板書等計画



(2) 当該授業後の評価

授業後には、授業をめぐっての振り返りをする。小グループで行う規模の小さな、いわゆる授業研究協議会である。約15分間であるが、質疑・応答の時間を取る。Aグループの他の8名から、質問・意見・感想が寄せられ、授業者がそれらにコメントしていく。詳細は略すことにする。

以下、グループのメンバーからの評価とコメントの概要、授業者の「教育実習Ⅰ模擬授業自己評価」表の評価とコメントの全容、並びに指導者の考察の順に記すことにする。

① グループのメンバーの評価

メンバーたちは、「模擬授業評価表」という小型の評価カードに、授業者の指導について、次の7項目にわたって4段階評価をする。

- 第1項目・本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している
 - ・先行実践等を参考にすると等して、授業者なりの工夫が見られる
- 第2項目・学習規律について毅然とした態度で指導している
 - ・学習規律を守っている児童を褒めたり、学習規律を守る意義を説明したりする等している
- 第3項目・児童の質問を聞き、それに的確に対応している
- 第4項目・児童の活動（意見、表現等）を観察し、それを適切に取り上げ、授業の中で生かしている
- 第5項目・すべての児童を授業に参加させるため、進んでいる児童、遅れがちな児童それぞれに適切な指導を行っている
- 第6項目・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている
 - ・学年に応じた正しく分かりやすい言葉遣いを行い、内容も簡潔にまとまっている
- 第7項目・1時間の学習の流れが分かるように板書している
 - ・児童の思考を促したり、理解を深めたりする工夫をしている

当日の評価を点数化し平均点を出すと、28点満点で24.1点（86.2%）と、決して低いものではない。同評価カードのコメント欄への記述内容をまとめると、以下ようになる。肯定的・共感的なもの、改善点を示したものに分けて列挙する。丸括弧内の数字は、複数のメンバーが書いたことを表す。（5）ならば、8名中5名が書いていたということになる。

〈肯定的・共感的なもの〉

- ・楽しい学習であった（5）
- ・神経衰弱ゲームは有効である（4）
- ・流れがスムーズ（2）
- ・発言への対応がよい（2）
- ・理解しやすい
- ・力がつく
- ・中学校への繋がりが考えられている
- ・事前準備がよい
- ・机間指導がよかった

〈改善点を示したもの〉

- ・古典に対して消極的な児童を引き込む工夫や配慮を入れるとよい（2）
- ・授業から脱線してしまう児童への適切な対応

② 授業者の自己評価

これも、先の「模擬授業評価表」と同様の評価カードであるが、授業者が自身の指導について、次の5項目にわたって4段階評価をする。ただし、各項目に細分化された評価の観点が出てきて、合計では12種の項目を評価する。版も大きくなる。レベルをつけるだけでなく、後に示すように、コメントを付すこともしなければならない。

第1項目 教材分析力——教材を分析することができる

第2項目 授業構想力——教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる

第3項目 教材開発力——教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる

第4項目 授業展開力——子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる

第5項目 表現技術——板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている

当日の授業者の評価点数は、48点満点で42点（87.5%）と、彼女なりに満足のいくものであったと推察する。

同自己評価カードのコメント欄への授業者による記述内容は、次のとおりである。

「模擬授業はとても緊張しましたが、今回の目標として“楽しい国語の授業にする”というのがあったので、児童役の盛り上がっている雰囲気や、これを小学校のときにやりたかったという声を聞いて、その点については達成できたのかなと思います。模擬授業をするといつも想定ミスだったなと思うし、時間配分が難しいと感じます。今回は15分だったから途中だけ45分でおさめなければならぬとなると、もう少し余裕ある展開にすべきかなと思います。また先生からアドバイスを受けたように、言葉と風景等を古いものと新しいもの（古代と現代）で対にしていたので、それを全体を通してやっていけばよかったと思います。まだ未熟なので気づきかけた自分を1つの成長として、次自分でスッキリするように全体の軸みたいなものをもてたらと思います。また児童のレベルにあった言葉を使ったり、難易度を考えたりしてさらなる成長をポジティブに目指していきます。」

③ 指導者の考察

授業者の自己評価に関しては、妥当であったと判断する。事前の相談も二度にわたって綿密になされ、授業者の計画を基に、指導者からの助言も取り入れて十分に構想を練り、当日に向けての準備も尽くされていたからである。

コメント欄への授業者による記述内容に関しては、授業者自身が、「今回の目標として“楽しい国語の授業にする”というのがあった」と語っているように、楽しいからこそ学習に集中するし、結果的に国語の力もつくのだとの信念を持っており、1時間の授業全体のデザインが作られていたこと

は特筆に値するであろう。それだからこそ、Aグループの学生たち自身が「児童役」として「盛り上がった」いたのであり、授業後に「これを小学校のときにやりたかった」と口々に語ったのである。その声を聞いて、授業者は心からこの授業デザインでよかったと感じたに違いない。

授業者は、自分なりの「軸」を求めていたからこそ、指導者の一言に敏感に反応し、「気づきかけた自分」に「成長」の兆しを感じたのである。それだからこそ、子ども役即ち学習者が納得のいくような、こちら側ではなく子ども側の「軸」の存在にも気づいたと思われる。

なお、記述中の「古代と現代」は、厳密に述べると、古典作品が書かれた当時における様相と現代におけるその様相、となる。その箇所直前に書かれているように、作品に出てくる「言葉と風景等を古いものと新しいもの」で「対にして」示すという、授業者ならではのアイデアである。授業者が反省点として挙げたのは、「風景等」を映像資料としてそのような示し方をしたのに合わせて、古典作品・その中の言葉(古いもの)と現代語訳・その中の言葉(新しいもの)も扱えばよかったと思った、という意味である。

授業者の自己評価としての振り返り欄の記述に対する指導者からのコメント内容は、次のとおりである。

「「対」になるもの、ということに終始目を向ける考えには賛成！ コンピュータ端末機器活用により、ゲーム的要素を盛り込んだ“ひきつける”展開に持ち込んだのも工夫大でした。教師の範読と児童のチャレンジ音読をふんだんに盛り込むとなおよいと思いました。未知の領域に進みますので。」

授業者は、Aグループ長でもあったことから、おそらく人一倍いい授業をしたかったし、授業準備に他の誰よりも念を入れていたと思われる。授業のいわゆる導入部分でクイズを取り入れ、楽しませると同時に“ひきつける”ことに成功し、展開部分へと歩を進めた。

指導者が助言したのは、音声としての受容を重視してほしかったという点、それ一つである。授業者の用意周到な手立てにより、『竹取物語』への歩み寄りはなされたのだが、肝心の作品本文への接近という面では、問題が残ったと言わざるを得なかった。音読を通した、児童なりの『竹取物語』との邂逅がほしかったのだ。授業者の自評で、「児童のレベルにあった言葉を使ったり、難易度を考えたりして」いくことが課題だとも述べていたように、自身の「成長」に貪欲な授業者に対して、タイムリーな助言であればと願い、上記のコメントを記した次第である。

2 全体代表授業について

ここでいう全体代表授業は、学生の全員が第1クールから第4クールの実践を終え、その総括をする意味で、4名の代表者を募り、フルタイム(45分間)の模擬授業をし、その後授業研究協議会をする形のものである。授業者は、第1クールで取り組んだ国語科の授業実践を基に、第2クールから第4クールまでの経験を踏まえ、代表授業者のうちの一人を務めることになった。以下、そこでの取り組みの概要を記していきたい。

(1) 当該授業の学習指導案

これについては、授業者も指導者も大きな問題点はないと判断し、前掲のものをそのまま用いることにした。

(2) 当該授業後の評価

全体授業後には、第1クールから第4クールと同様に、授業をめぐっての振り返りをする。ここで

は小グループではなく、34数名（授業時は子ども役である）による本格的な授業研究協議会となる。約30分間であり、質疑・応答の時間を取る。総合司会は国語科担当以外の別の教員が行い、授業者が質疑に対する応答をし、指導者が終わりのところでコメントをする。詳細は略すことにする。

以下、「1.」と同様に、参加学生からの評価とコメントの概要、授業者の「教育実習Ⅰ模擬授業自己評価」表の評価とコメントの全容、さらに指導者の考察の順に記すことにする。

① 参加学生の評価

学生たちは、先にも触れられた「模擬授業評価表」という小型の評価カードに、授業者の指導について、7項目にわたって4段階評価をする。

当日の評価を点数化し平均点を出すと、28点満点で24.9点（88.8%）と、5月段階よりさらに上昇している。かなりいい授業だったと評価しているのである。

同評価カードのコメント欄への記述内容をまとめると、以下のようなになる。

〈肯定的・共感的なもの〉

- ・クイズや神経衰弱ゲームなどの導入が有効であった（17）
- ・流れがスムーズであった（4）
- ・児童をよく見て、質問や発言に丁寧に反応していた（4）
- ・事前準備がよく、工夫もされていた（3）
- ・話し方が丁寧であった（2） ・落ち着いて、いい雰囲気を作っていた（2）
- ・授業でも協議会でも堂々としていた
- ・「こんな授業にしたい」と思えるような考えさせられるような授業で良かった
- ・質問を全体で復唱させたこと

〈改善点を示したもの〉

- ・声のメリハリをもっとつける（13） ・時間配分（4）
- ・古典に親しむことを重視すること（3）
- ・指示をより明確なものにする（2）
- ・導入の今と昔の住宅の違いで、昔が外部で今が内部だったから、どちらかに統一する
- ・音読もいいが、文章の中身にもっと触れる
- ・同じところと違うところを書く活動は難しかったようである
- ・つぶやきを拾いすぎたこと ・活動後の興奮のしずめ方
- ・古文と現代語訳を一文ずつ交互に読ませるとよい
- ・「～したいと思います。」は言わないようにするとよい

先ほど言及した「模擬授業評価表」において点数が高かったことと、コメントとして改善点が相当数出てきたこととは、一見矛盾しているようである。そうではない。参加学生も、目が肥えてきたのである。いいことはそれとして認めつつ、「待てよ、もしも自分が授業者だったら…」と考えていけるようになってくる。児童役が多くなり、大変な面を考慮して、よく頑張った点を挙げていきつつ、敢えて言うならばと、自分に言い聞かせるようにして、改善に関するコメントを書いているのである。その思いは授業者にも伝わるであろうし、このようなやり取りができる点が初等教育学科の学生ならではの、と手前味噌になるが、クラス・仲間の良き風土であると認めておきたい。参加学生としても、ここでは45分間の子ども役をし、授業研究協議会をしっかりとしてから、腰を据えてコメントを書いたことが、授業者にとって有益な「改善点の提言」につながったと言えるだろう。

② 授業者の自己評価

当日の授業者の評価点数は、48点満点で5月の時より1点減の41点（85.4%）となった。児童役の人数が格段に増えて苦慮したこと、45分のフルタイム授業となったことが理由であろうが、やはり授業者なりに頑張ったという思いが込められているものと判断する。基本的には、授業者として自身の構想に沿った指導ができたとの感触があったと思われる。

先ほどの参加学生のコメントと同様に、自己評価カードのコメント欄への授業者による記述内容も、幅が広がっていった。以下のとおりである。

「今回の授業をして、初めて分かったことだったり、学びだったり、授業構想力の不足だったり、気づくことは多々ありました。授業の姿勢等、どの教科にも生かせることに関しては、声の大きさや指示出しの明確さ、時間がないときの対応、押さえるところはきっちり押さえる（時間がなくてもとばさないところを決めておく）等、改善点はありました。ですが、話しぶりが良い等の友人のコメントは自信になりました。15分の模擬×3と社会の45分模擬×2、中学校英語の35分模擬を終えた上で臨んでもなお課題はあり、今後いっそう成長していくべきだと、本実習の目標にもなりました。また、授業構想、展開についてはまだまだ考えが足りなかったと思います。一つひとつの活動の工夫については、できたと思うのですが、活動のつながりやめあてとの整合性が今一つ不足していました。評価規準、学習指導要領の内容を達成するため、また本時の目標を達成するためにうまく削り、つながりを児童がしっかり分かるような流れを再度考え直さなければと思います。ある先生から意義を常に分かっておいて、なぜこの学習をするのか言えるようになっておくようにと言われました。古文は生活と関係なく思えるので、より難しいことですが、ねらい、その学びのよさを伝えられる先生になり、信頼関係を築いていければと思います。」

③ 指導者の考察

上記の授業者のコメント内容は、参加者のコメント内容との相即が見られ、的確である。当日の授業研究協議会では、すぐに気づけなかった点が多々あるに違いない。時間を置いて、友人のコメントも噛みしめながら、自身の成果と課題が総合的に記述できていると見ることができる。でき得るならば、他の学生全員に経験させてあげたい、と切に思う。

ここでの一連の取り組みは、まさに啐啄の機にたとえられるのではないかと考える。授業者は雛にたとえられ、指導者は親鳥にたとえられる。授業者は、「15分の模擬×3と社会の45分模擬×2、中学校英語の35分模擬を終えた上で」と次第に力を蓄えてきたこと、持ち前の向上心とあいまって、殻を内から盛んにつついていく。「話しぶりが良い等の友人のコメントは自信になり」と述べているように、仲間たちの応援の力や、指導者からの助言に、殻の外からも殻をつついてもらい、刺激してもらっている。仲間たちや指導者たちの存在がまた重要で、①この教育実習I、②授業者の所属ゼミ、③中学校英語科教員免許科目に関する授業、という三つの場で、それぞれに仲間や指導者がおり、その存在を大切にすることで、自己の成長が図られる。逆に、それらを大切にしないと、つまり唯我独尊の気持ちで自己の考えだけを押し通そうとしたり、その存在を疎ましく思ったりすると、成長は自ずと鈍る、と経験上言うことができる。この授業者は、もちろん成長に向かって邁進している。

「今後いっそう成長していくべきだと、本実習の目標にもなりました」以下の記述内容も重要である。自己の実践を評価するとき、ルーブリックにより点数化したりレベルに置き換えたりするだけでなく、文章記述により質的な評価もしていくことの有効性がよくわかる箇所である。まさに、反省的实践家としてのスタートであろう。このような実践を積み重ねれば積むほど、自己の課題が見えてくる。それを解決すべく思考している。間違いなく、殻の内側のエネルギーが高まる。他者からの言葉は、時に厳しいものもある。待ったをかけるような、再考させるような言葉が出てくることもあるのである。殻の外からそのような言葉がかけられ、殻を押さえてすぐに外へ出させないようにすることもあるのである。

授業者の自己評価記述へ指導者からのコメントとして書いたことは、「私からはあえて反対のことを言わせてもらいますと、教師が滔々と熱弁をふるって古典とは何ぞやと言うのは感心できません。力のない子には全く響きません。「先生、面白いね。古典って、〇〇なものだね。」と子どもに言わせてこそプロ。かなり高い要求が各教員から出され、また、友人たちからも歯に衣着せぬ指摘もあり、授業者としては予想外の大収穫だったと思います。やったからこそのご褒美です。本当の

ご褒美は、甘くおいしいだけでなく、辛く苦いものもあります。自分次第で、何倍もの価値を持つでしょう。」であった。

「辛く苦いもの」こそ、当該時間の指導以上のレベルに授業者を向かわせてくれる。実践するからには、必ず何らかの成果は得られる。それはそれとして、課題を冷静に見つめ、解決に向けて再度取り組みを開始する。授業者にとっての成果と、課題。友人からの誉め言葉と、苦言・箴言。指導者からの認めと、叱咤激励。いずれの均衡も大切であり、授業者が伸びるためには不可欠である。

3 まとめ

ここからは、上記の取り組みと、本科目のシラバスにおける「授業のねらいと概要」、「到達目標」、「成績評価方法」と照らし合わせながら考察を加え、まとめとしたい。下線は、筆者によるものである。

(1) 授業のねらいと概要

①本実習（教育実習Ⅱ・Ⅲ）に臨むにあたり、実習生としての確かな心構えと教育実践力を養うことを目標とする。前年度に終えた観察実習（教育実習Ⅶ）の体験、各教科教育法の学びをふりかえり、教材研究や学習指導案作成の仕方などをより深く学習する中で、事前に取り組むべきことを明確にする。

②小グループに分かれてからは、教材研究・教材開発、模擬授業、授業後の協議会に取り組む。授業外の時間を活用して、模擬授業に関する担当教員との打ち合わせを行い、指導を受ける。指導を生かすとともに、模擬授業の練習・準備も自ら行い、充実した取組になるようにつとめる。模擬授業後は、自己評価を行い、担当教員に提出し、さらに指導を受ける。

教育実習Ⅰのグループ長を中心に③教育実習報告会実行委員会を組織する。後期の本実習終了後は、実行委員会を中心に教育実習報告会を企画・運営・実施し、学習のまとめとする。なお、実習報告会も原則全員参加である。

本学における教育実習の特色は、④省察性、協働性、同僚性、段階性、主体性、総合性である。

授業者は下線部①の目標をクリアすべく、下線部②③の組織的活動に、中心となって取り組んだ。力がつかない理由がない。

他の学生は、リーダーではなくフォロワーになるが、自分のこととしてリーダーに協力して、互いに切磋琢磨した時、下線部①の目標は達成できる仕組みになっている。下線部④は、その目標をクリアするための手がかりであり、それぞれが伸びればその結果として目標が手中に入る関係である。目標が達成できた時の種明かしともなるキーワード群である。

また、ここで明らかなように、全体授業（代表者授業）は「全員マスト」のものではない。現状では、限られたメンバーしか挑戦できないものである。そこでの授業者にならずとも、下線部④のキーワードを一人ひとりが押さえることにより、授業者と同じぐらいの力量に迫ることができる。

(2) 到達目標

本授業では、以下のように到達目標を定める。

- ①各教科・領域の復習、参考資料（学習指導案・先行実践例）の収集、教育者の実践や指導技術・指導法についてのレポート課題に取り組み、基礎をかためる。
- ②各教科・領域の学習指導案について理解し、自分で書くことができる。
- ③教材研究・教材開発に取り組み、教材・教具なども準備することができる。
- ④学習したことを活かして、授業者・学習者として模擬授業に取り組みすることができる。

四つの目標は、全てが有機的につながっている。それぞれが、均衡を保っていかなければならない。事前課題にしても、レポートにしても、学習指導案にしても、教材・教具にしても、模擬授業自体のパフォーマンスにしても、「形」は何となくつくものである。ルーブリック評価で客観的に振り返り、収穫や反省などの言葉にしてみた時、「形」のあとを「心」が追いかけてくる。ここでいう「心」の実質は、この取り組みをした授業者の場合、例えば先のコメントの「一つひとつの活動の工夫については、できたと思うのですが、活動のつながりやめあてとの整合性が今一つ不足していました。評価規準、学習指導要領の内容を達成するため、また本時の目標を達成するためにうまく削り、つながりを児童がしっかり分かるような流れを再度考え直さなければと思います。」のように、活動の一つひとつを「つなぐ」ための何かを発見しよう、学習指導案で該当する部分を「自分のもの」にしよう・「学習者（子ども）のもの」にしようといった、意欲・態度となって身体の中に宿るのだと思う。

(3) 成績評価方法

「授業評価表」（ルーブリック）に沿って評価を行う。

模擬授業（授業者）、模擬授業（児童役）、課題レポート、振り返りカードの4項目について、レベル1（1点）からレベル4（4点）の4観点で評価する。

模擬授業（授業者）の項目は、教材分析力、授業構想力、教材開発力、授業展開力、表現技術の5観点に大別できる。

提出物（春期休業中の課題、学習指導案、毎回のコメントシート、代表者模擬授業振り返りシート、自己評価シートなど）は全て提出すること。

特別な事情がない限り、全回積極的に参加するよう心がけること。

賢明なる読者は一瞥するなりお気づきのように、評価の「核」「肝」に当たる部分はルーブリック評価であるが、「～シート」（そこでコメントを書き記す活動）がいたるところに付随している、質的評価が相即不離となっているのである。そこが、特長である。各学生が授業者のようにより丁寧に取り組む時、上述のような「心」が育っていき、各人の内面に定着していくのである。

この「教育実習Ⅰ」で使用しているルーブリックは、この科目において住民権を得たと見てよい。それをより生かすためには、学生一人ひとりの振り返りコメントの存在が鍵を握っているのだということをクリックアップできたと考える。それが、本研究における何よりもの収穫であったと申し添えたい。

参考文献

- 岡 利道・今崎 浩・大野内 愛. 2016. ルーブリック評価の運用に関する研究—小学校各教科の模擬授業・卒業研究の場合—. 広島文教女子大学教職センター年報, 第5号, pp.1-20.